

浄土

1986-7

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省特別投承認雑誌) 第三二五号
昭和六十一年六月二十五日印刷 昭和六十一年七月一日発行
第五十二卷 七月号





七月の秀句

夏あはれ生きてなくもの木々のあひ

室生 犀生

夏雲の湧きてさだまる心あり

中村 汀女

夕月に七月の蝶のぼりけり

原 石鼎



無量寿仏を観ぜん者は、一つの相好より入れ。

——『観無量寿経』真身観文

目 次

法 話

身とところ.....大 橋 英 正.....(2)

供養の心.....土 佐 舜 成.....(8)

——孟蘭盆会に寄せて——

《紀行》

三浦半島寺めぐり.....福 島 瑞 江.....(12)

＜連載＞ 一紙小消息 ⑫

おこし難い道心.....村 瀬 秀 雄.....(18)

み仏とともに =16=

——幡随院住職——.....安 居 香 山(24)

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記(十一).....木 下 隆 一.....(29)

◇◇ 長篇連載小説 ◇◇

立ち止まるな善導 第25回

女の戦争

.....寺 内 大 吉.....(35)

挿絵 松濤 達文

表紙絵「あじさい」 松浦春子 画

(法)

(話)

身 と こ こ ろ



1 脳 死

△脳死と肝臓移植▽

ある月刊誌のエッセイ欄に、さる医大の教授が「脳死について」書いておられる。劈頭

おお
はし
えい
しょう
大橋英正

(淑徳学園中・高校長)

に、5つの条件が整った場合、手術をするかどうかの当否について、問題を提起されている。

(ア) どうしても助かりたいと願う末期肝不全の患者がいる。

(イ) 肝臓移植を行える医師が待機する。

(ウ) 設備も整っている。

(エ) 肝臓を提供できる脳死者がいる。

(オ) 脳死の診断は厚生省基準に適合している。

このような状況で、患者の懇願を退けて、また、提供者側の好意を無視してまで、移植手術を行わないことが、医師として、とるべき態度であろうかというものである。

右の5条件が揃っていても、慎重派の人々は「このような手術は、コンセンサスを得てから実施すべきである」という意見が出ることを予想し、それでは、この「コンセンサスを得る」とは、一体、具体的にどういうことなのか、すべての人が納得するということか、果して期待できるだろうか、との問いを起し、同教授は「結局はそれが全体のコンセンサスに連なると確信するが故に」その現場における局所（患者・提供者家族・脳死診断医・移植医など）のコンセンサスを「大切にすべき」ではなからうかとの所信を述べておられる。

△ライフサイエンスの意識調査▽

総理府で行われた「ライフサイエンスに関する国民の意識調査」に、第2項目の(5)臓器移植手術を行うことの是非、(6)脳死状態で臓器移植を行うことの是非、というのがある。

第(5)に就ては、

臓器移植を受けて病気を治したい 四・八％
受けてまで病気を治したくない 四・九％

両者略々同じ割合となっており、

第(6)に就ては

移植を行うべきでない 四・九％
移植を行ってよい 四・六％

との結果が出た。(5)は治したい、治したくないが略々半々であるのに対し、(6)は行うべきでないが行ってよいに比して、約倍に近い率を示している。従来の生命観倫理観よりすれば、既述のコンセンサスを局所に限定しても、移植手術は時機尚早の感が深いと考えられる。注目すべきは、(5)の病気を直したい、

(6)の移植を行ってよい、の何れもが若年齢層(30歳台が最高率)・高学歴者に多いということである。

調査は昨年12月実施、本年6月号の月刊誌に発表され、さきの教授の発表誌も6月号であるので、両者間に著しい時間的のひらきもないのであるが、われわれの平均的な自然観が全く影をひそめたとはいえないけれど、何らかの変貌を遂げつつあり、近い将来、「移植を行うことに違和感もなく、移植を受けても病気を治したい」望みが、何の抵抗もなく受け容れられるときが来ることを暗示しているように思えてならない。

2 はしる

△ホノルルマラソン▽

身心一如ということがよく言われるが、これは、肉体を離れて精神はなく、精神を離れては肉体もなく、その実体は全一であるとい

うことで、性相不二(実体と現象とが本来不二)・色心不二(色と心とが不二)というのもこれと同じ考え方によるものであろう。

作家灰谷健次郎氏の随想「遅れてきた走者」という一文を読む機会に恵まれた。紹介してみたい。

「五十歳になって肉体を鍛える面白さにとりつかれた」という書き出しで、友人2人からマラソンを奨められて走るようになった経緯が語られ、ホノルルマラソンに参加してから、従来の氏のマラソン観が一変する。

ホノルルマラソンそのものは、20キロ地点で完全に挫収という大失敗であったが、その時、「走る気持ちがあっても体は動かない、心臓はなんともないのに、どうにも動けない」という経験者でないと味わえない奇妙な感覚を体験されるのである。

△渾然一体▽

氏のこの貴重な体験を通して、肉体と精神

とが一つになつてはじめて、生命ある人間として、調和のとれた営みが完うされることを悟得される。「精神が主、肉体が従の關係に立つが如き認識のもとにあつては、それぞれが円滑に作動しなくなってしまう」が、転機後は「体の各部分がそれぞれ相談しながら走っているという感じで、走ることによつて体のほぐれてくるのがよくわかる」ことを体認されている。氣負いを捨てて走っていると、前にかんばつて走っていた時より（スピードも）ずっと速いとのことである。

△不二の世界▽

理論偏重ではなくて、実践を通して、それを重ねつつ考え、考察をめぐらしながら実動を繰り返す、さらにそういう意識をも捨離した境地に所謂自然体の解行相應のこの感想文は静かではあるがすごい説得力をもつてわたくしに迫り、大變な感動を呼び起されたことである。

「走る」ことを「人間の生活」にまで拡充してみると、これは人生の道標とも指標ともなり得るもの「智目行足」とか「身心一如」の現代版とはならないものだろうか。

3 世代のひらき

△意識調査に表われた自然観▽

さきの調査、第5項目には「自然観及び動物観」を設定している。

○生物や自然の営みに従いつつ、

人間の役に立つよう利用する。

五・八%

○人工的な手を加えることなく生

物や自然は生の営みのままに任

せる。

二・四%

右の結果も、前者は男性の方・30代・高学歴者に多く、後者は60歳以上の年齢層に多い点で、前掲と同様の傾向がみられる。興をそられると同時に深く考えさせられる。

右の事象はある程度予想され、全く理解で

きない訳ではないにしても、われわれの期待とは遙かに距離をおくもので、この儘推移すれば若い世代との間に接点すら見失ってしまうのではないかと、気を揉まずにはいられない。ここにこそ、一切のこだわりを捨てて、虚心に、まじめにそれぞれに共通する課題の研鑽が要請され、切にその実現を希うものである。

△科学▽

サイエンスは現在の日本語でいえば「学問」というほどの意味にとっても差支えなさそうである。（「ライフサイエンスの哲学」沢田允茂 講談社学術文庫）

以下、沢田氏の研説に従えば、科学（諸科学）は観測・実験・それに基づく理論の構築・組織体系化の経過を辿り、今日まで異常な発展を遂げ今後さらに大きな飛躍が約束されているが如くである。進みを重ねつつある科学の恩恵に浴しながら生活を営んでいるうち

に、夢にも考えなかった憂慮すべき新たな事態が起ころことになる。

△生命科学▽

過去のイメージを崩壊させるような新たな事態とは、科学と結びついた技術の発展が、人間社会に寄与するのではなく、むしろ環境破壊の要因として人類の生存を脅かそうとすることである。例えば、遺伝子のコントロールによって生ずる人間改造の問題、人工受精によって生ずる人間のラモルの問題等、この儘進めば、多岐にわたる生活の混乱・破壊をもたらすおそれの生ずることがそれである。時には科学が倫理宗教等に配慮するいとまもなく独り歩きを始め、コントロールのきかないままに、人間が本来具有する道德宗教との間に相克を起こし、ある場合にはその否定にもつながりかねないような混濁（五濁悪世）の世界を将来することを懼れざるを得ないのである。意識調査の目的にも、

人類の福祉を向上させるために不可欠な科学技術として、医療・食料・エネルギー等の広範な分野の発展が求められており、(中略)先進国として生き残るため最重点科学技術として、研究開発を進めている。(下略)とあるが、敬虔で謙虚な心を失わず、一切の生あるものの共存が全うできる技術の発展を希う次第である。

灰谷氏は自然界の一存在としての人間のいのちに思いをいたされ、やさしいいのちの発見・創造に到達された。生命科学も自然と人間が有機的に働き合い、全体の要素としてあるという人生観・世界観の確立が最喫緊事であることは間違いない。

△おぼん▽

阿難尊者にまつわる「いのち」、目連尊者の「孝心」の教えを深く考え、静かに反看する機縁ともなり、毎日の生活に深みと厚みを与えて下さる「おせがき」「おぼん」の時節が

訪れる。

ご先祖の恩徳に感謝し、いのちを大切にしてお過ごし、
「アミダさま」のお導き、お念仏のおちからを有難くいただき、一層の充実を祈念しながら、何らかのお役に立てるようこころし
て、感謝報恩のまことが、わずかであろうとも尽せばと念願する次第である。

△付記▽この稿を終えたとき、偶、「脳死」で死と判定OK』という記事が目に入った。
「脳死」を人の死と認められるかどうかを論議してきた日本法医学会の「脳死に関する委員会」は、「脳死をもって個体死(人の死)」とすることができるとの基本方針を打ち出し、名古屋市で開催中の第70回総会で中間報告した(毎日新聞)と報じ、これは、17年ぶりの「脳死認知」に向けての大きな動き出しとの解説を施している。

これにつけても、時はつねに進み動いていくとの感が深い。

(法)

(話)

供養の心

— 盂蘭盆会に寄せて —



と さ しゅん じょう
土佐舜成

(財)国際仏教興隆協会理事
(神戸市阿弥陀寺住職)

またお盆の月です。地域によって七月ないし八月の十三日から十六日まで行われるご先祖さまへの供養です。

古来よりお正月とともに「盆正月」と呼ばれるほど重要な国民行事として伝承されており、大都会に住む人々は故郷へ帰って菩提寺への参詣、ご先祖のお墓詣り、又恩師をはじ

め幼な友達との出会いを楽しみにしていること、誠に奥床しい里帰りといえましょう。

さて、お盆とは盂蘭盆(サンスクリット語 ULLAMBANAの音写)の略で、逆吊しの意味、亡き人が死後さかさに吊されるような非常な苦しみを受けているのを救うために、三宝(仏法僧)に供養すること、今日では特にご先

祖さまの靈を供養する法会をいうようになったのです。

私たちは逆吊しの考え方に思いをいたしましょう。自分だけが良いといったエゴイズム（利己主義）を仏教は斥けます。それが個人であれ、国家であれ「欲望のとりこ」になったもの、即ち貪欲とんよくの中に没して逆立ちしているもの、畜生道、修羅道、餓鬼道への転落の姿だと見ているのです。

亡き人への供養はすることはない。それより自分のことが第一だと顧りみない子孫があったとしたら、それを見るご先祖の心の痛みはいかばかりでしょう。

供養することによって自身の本来の姿に立ちかえる。それがそのまま、ものの哀れさを感知し、お互いに生きている間、たとえささやかながらも人のため、世のためにお返しをさせていただく思いにも通じましょう。

孟蘭盆こそウウンバーナ（逆吊し）の苦を脱却する道だと確かにいうことができます。苦しみを脱し、その喜びを感じ踊っている姿があちこちで見られるのが所謂盆踊りです。

孟蘭盆行事の典拠は、大乘經典の重要な一部、「孟蘭盆經」にて、仏陀の直説を集録したものではありませんが、仏滅五百年頃の熱烈な仏教徒たちが仏陀の教を新時代に生かすべく經典を編作宣説したものです。

これらの大乘經典には、仏陀の精神が最もよく生かされていますので、八仏説はつふせつと名乗り、また何人も仏説たることを疑わなかったのです。

さらに中国（唐）の「孟蘭盆經疏しよ」などに引用されており、朝鮮半島、日本にも伝えられて非常に流布し、多くの註釈が作られ、ことに日本では文学作品中にもしばしば引用され、中国、朝鮮半島、日本の仏教受容の態度を伺

い知ることができます。

なお、施餓鬼は施餓鬼会の略で施食会、水陸会、冥陽会ともいわれます。

施餓鬼会は地方により又宗派により盂蘭盆施餓鬼、お彼岸施餓鬼、年忌施餓鬼と異なりますが、本来は毎日されてもよいわけです。即ち清浄な地や水に食物を散じて惡道に墮ちて飢餓に苦しんでいる衆生や餓鬼に施す法会です。

これは仏陀の十大弟子の一人で多聞第一といわれる阿難尊者の前に、名を焰口というその身体は瘦せこけ、咽喉は針鋒の如く、頭髮は乱れ、口中より火焰を吐き、面上に火を燃し、爪は長利にして甚だ恐るべき餓鬼が現われ「お前は三日後に命が尽き、餓鬼の申に生れかわる。そうなりたくなければ餓鬼道に苦しむ者たちに食物を施し、三宝（仏法僧）を供養すれば、その功德によって寿命増長し、餓

鬼の苦を免れて天に生ずることを得る」と。阿難尊者は事をのべて釈尊に教えを求め、時に仏陀はその求めに応じて教示され、「無量威徳自在光明殊勝妙力」という陀羅尼を説かれたのがこの施餓鬼会の修法であり、主意は施食です。

中国では天監四年（五〇五）、梁の武帝が金山寺（江蘇省・鎮江）で行ったのが起源といわれています。

日本では施餓鬼会に五説、即ち一、「盂蘭盆經」二、「救面燃餓鬼陀羅尼經」三、「甘露水陀羅尼經」四、「施乳海水陀羅尼經」五、梁の「武帝水陸齋會儀文」がいわれていますが、専ら「救拔焰口餓鬼陀羅尼經」（焰口經）の説によって執行されています。

私が幼き頃、父が毎食前に際して自身のご飯からいつも数粒ほど別のお皿にとってから境内に散じて、後に食事をしていたことが思

い出されます。その頃ご飯は一粒でも残しては勿体ないと厳しく教えられていました私には、父のこの所作を見てむしろ不思議に感じていたことが、今にして思えば施食ということでしょう。

大乘仏教徒の行すべき六つの徳目である六波羅蜜に布施、施しが説かれ、また仏道実践者が人びとをおさめて守る四つの仕方としての四摂事にも施し、与えることが説かれています。

私たちは誕生以来今日まで、また今後も自分以外のあらゆるものによって育てられ、支えられているのです。ひと度心の眼を開くならば如何に有難きこと、尊いこと、忝ないこと——と謙虚に如来さまに合掌し、お盆の真実義を解し、また施餓鬼の本意を感知して、ささやかながらも布施行につとめてまいりたいものです。

長田芳一画 五雨みなこ文

絵本 ほうねんさま

B 6変型判／定価三〇〇円

右近れい子画 福嶋智誉編

絵本 おじぞうさま

B 6判／七二頁／定価四〇〇円

◎ 仏教まんが・教育図書

——多数発行——

大 道 社

〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―一六

電話(〇三)二六二―五九四四

振替(東京)一―八三四七

《紀行》

三浦半島寺めぐり



巡礼とか、あるいは遍路とか言って、私たちは聞きなれた言葉だが、さて、それでは一体、いつごろからこうした信仰、習俗が始まったのかとなると、もうこれは学問の領域である。

そして、「古寺巡礼辞典」を筆頭に、この分野での研究書には「巡礼の社会学」（前田

福嶋瑞江

卓）、「日本民間信仰論」（桜井徳太郎）等々があり、さらに「旅のなかの宗教——巡礼の民俗誌——」（真野俊和）のような随想・随筆を加えるなら、およそ枚挙に遑のないものになる。

ところで、この巡礼が日本にかぎったことではないのは言うまでもない。キリスト教で



——モンツェラートの鋸山（スペイン）——

は、エルサレムへの聖地巡礼はもとより、
「何々のメッカ」という表現までも生みだし
たイスラム教の聖地メッカを目ざす、熱烈な
信仰の旅もあれば、ヨーロッパ各地にも、ま
た聖人の徳を慕う巡礼が今も盛んに行われて
いる。

私がかつて訪れた東スペインのモンツェラ
ート（鋸山）でも、「黒いマリアの巡礼」の人
たちに出会った。ここは、聖ヤコボの遺骸を
拝もうと、全ヨーロッパから巡礼の集まっ
てくる、かの有名なサンチャゴ・デ・コンポス
テーラへの路と並んで、南仏から黒いマリア
像を巡拝する長い巡礼路のひとつである。た
またまその日が、聖母マリアの誕生日にあた
る九月八日であったせいか、バスを連ねた巡
礼のなかには、遠くアメリカからきた人たち
もいるとか、大そうな賑いであった。

このような巡礼の地には、洋の東西を問わ
ず伝説や民話がつきものである。このモンツ
ェラートも、キリストが磔刊に処せられたと

きに、その血を受けたといわれる聖杯を、騎士たちがここで守っていたとされていて、ワグナーの楽劇「パーシファル」の舞台となっている。

さて、前置きが長くなったが、巡礼といっても、四国八十八カ所や秩父霊場をめぐるだけにかぎったものではなからう。あるとき、思いたって古利を訪ね歩くのも、またそのひとつと言ってよいのではなからうか。

と、こんな生意気な口をきくのも、私がたまたま去年の梅雨どきに、その晴れ間を縫うようにして、三浦半島の寺をいくつかまわったからである。それもちょうど去年が三浦の三十三観音の御開帳にあたっていた。

普段はなかなか拝観の許されないご本尊さまも、御開帳のときはなんなく拝めるし、寺宝も拝見できる。本堂も美しい五色の幕布に飾られ、お手綱の張られた境内は、ひとときわ華やいだ雰囲気をかもしだしていて、お参りの足取りも軽くなるというものだ。

むろん私は一番の札所から順をおってきちんと三十三カ寺をめぐったのではない。ある一日は久里浜駅を起点にし、ある一日は三崎から油壺の一带を探訪するといった按配である。そのなかでも印象深かったのが、十五番の浄土宗吉井山真福寺であった。

いわゆる鎌倉街道の名残りをとどめる細い山道をあがってゆくと、いかにも鄙びた山あいの寺で、屋根は葺ぶき、寺内には小さいながらも池もあった。ご本尊さまは瀧見観音とって、観音さまが体を斜に瀧を見上げていらっしやる珍しい形である。ところが、そのお前立の観音さまが、可愛い赤ちゃんを抱いた、世にいう子育て観音、今日ではマリア観音なのだ。

このような観音像は、関東地方では秩父四番の札所にある慈母観音と二体だけと言われている。しかし拝見したところ、この真福寺の御像の方が、隠れキリシタンの意図するところがより鮮明にうかがわれるように思われ

た。

鎌倉あたりでも、その頃のキリシタン禁令で、死罪にあった人も多かったという。そういう人たちに墓所を提供したのが、山之内にある光照寺である。今でもここの山門には、あきらかに十字架の飾り物がつけられている。



——マリア観音(子育観音)——

しかし、真福寺のこの像は、昔は浦賀にあったが、難を避けてこの山寺に、ひっそりと安置されたのだそうである。中国との交易のあった浦賀港には、カトリックの司祭も中国船に乗って寄港していたらしい。ちなみに、この寺へは子育観音のえにしで秩父からのお参りが多いとも聞いた。

さて、こうして三浦三十三観音を訪ね歩くうちに、遅まきながらこのあたりには、三浦氏ゆかりの寺の多いことが分かってきた。例えば、油壺に近い第三番の円通山観音堂である。またの名を蓮乗軒というが、ここは三浦一族最後の族長、すなわち三浦義同道寸の奥方が、夫が新井城で討死したのちに、髪をおろして佛に帰依し、庵を結んで隠れ住んだあとのことである。

そこで、私の三浦半島行脚は、俄かに三浦氏の史蹟として名をとどめる寺々へと傾いたのだった。

ご承知のこととは思いますが、そもそも三浦氏

とは、桓武天皇の曾孫高望王から出た、世にいう関東八平氏の一党だが、その孫の為通の代に衣笠の地に城郭を構え、三浦長門守と称した。これが三浦氏初代に当たる。

そして、この為通の二人の息子によって、二代、三代と継がれ、五代三浦義明の代には関東一門に勢力を伸ばし、息子義澄の子た



——和田義盛の身代り薬師如来——

ち、つまり義明は自分の孫たちを三浦半島の要処々に配して、全く蟻の通る隙もないほどに堅めたという。

この時、まさに世は源氏勃興から源平の戦乱の最中であつた。戦につぐ戦の時代のつねとはいえ、武勲詩とともに数多くの哀話もまた語りつがれている。この三浦氏の興亡の歴史については「実録三浦党」(岩間尹)などに詳しい。

さて、三浦氏ゆかりの寺をあげると、まず為通・為継・義継の三浦氏三祖の墓所を擁する清雲寺がある。ここでも唐伝来といわれ、桓武天皇の御后から三浦氏に伝承された瀧見観音がご本尊として祀られている。いかにも彫の線が唐様であることが、素人の目にもはっきり分かる特異な御像である。

さらに、満昌寺、満願寺と杖をひくと、史跡としても、また国の文化財としても重要な見事な佛像に出会い、お参りの甲斐があつたと合掌する手に、いっそうの有難さがこも

る。そして、この満昌寺には三浦義明の像が、また来福寺にはその孫の和田義盛のそれぞれ立派な像が祀られていて、気骨ある武将たちの面影がありありと偲ばれる。

しかし、なんといっても特筆に価するのは、三浦市初声町和田の天養院であろう。この浄土宗のお寺には、身代り薬師如来といわれている変わったお薬師さまが安置されているからだ。

バス通りから横へ上った小高い丘には、思ったよりも明るい寺域が開け、本堂にあがるとまず目に入るのは、他ならぬ法然さまの御姿である。その傍らにある一本造りの薬師如来座像には、右頬のあたりから胸元まで、いかにも刀傷のように縦に裂け目が通っているのだ。

これには、次のような言い伝えがある。前にあげた三浦義明の孫の和田義盛が館の鬼門除けの鎮護としたこの像に、建暦の合戦で義盛自身が同じような手負いを受けたのに、生

命の長らえたことをこのみ佛の前で感謝すると、見る見るうちに御像の傷から血が流れて、身代りになったというのである。

こうした話を聞いて、すぐさま一笑に附してしまふのは惜しいことである。確かにそうだったろうと思った方が安心できる。というのも、スペインにもこれと同じような話が残されているからだ。

日本に初めてキリスト教を伝えたザビエルは、インドで布教しながら、その猛暑に苦しんだことがある。そのザビエルの生まれたスペインのハカに近い居城では、あるとき城内の聖堂にある十字架のキリストが、あまり汗をかくので、不思議に思わない人はいなかった。そして、後で調べて分かったことは、ちやうどそれはザビエルがインドで暑さたたかっているときだったという。

このように信仰とは、ときには不思議な事象も可能にするものなのである。

おこし難い道心

村瀬 秀雄
むら せ ひで お



「おこし難き道心を発して」

道心は仏道修行を志す心のことであって、菩提心と同じ意味である。菩提心は身ら悟りを求めたいと願う心であり、同時に他にも教えて悟りを求めるように勧めることである。もし仏の教えを学んで修行したいと願うならば、まず菩提心を起さなくてはならない。釈尊は韋提希夫人の要請に応じて極楽往生の行

を説くに当って、その前にまず基本的な心掛けとして次のようにの給うた。

「菩提心をおこして因果の道理を信じ、大乘經典を誦誦し、人々に仏法を説いて修行することを勧めるのである」(観無量壽經)

このように菩提心をおこすことが仏道修行の前提であるだけに、各宗の解釈がまちまちであって一様でない。法然上人は聖通門を捨てて浄土宗をたてたのであるから、菩提心に

ついでに解釈も聖通門の解釈と違うのは当然である。上人は次のように説いた。

「菩提心についての解釈は各宗によってそれぞれ違っているが、浄土宗の解釈は極楽浄土に往生したいと願う心を菩提心という」(三部経釈)

それなら善導大師はどうかというと、上品下生の経文に説かれている無上道心は還相廻向の意味であると解釈した。その上品下生の経文には次の通りに説かれている。

「上品下生の者というのは因果の法を信じながらも時としては疑念を挟み、それでいて大乘の教えを誹謗することがない。ただ無上道心をおこし、この功德を廻向して極楽浄土に往生したいと願う求める者のことである」

(観無量寿経)

この経文について、大師は次のように解説した。

「上品下生の者は因果の法を信じないことがあっても、大乘の教えを誹謗しない。もし誹

謗したとすれば、千の仏が囲んで救済し給うたにしても救済できないのである。しかし大乘の教えを誹謗しないだけでは功德が大きいとはいえないので、最高の悟りを求める道心をおこすのである。この道心というのは念仏を唱えて極楽浄土に往生できたならば、すべての人々を救いたいという菩薩の悲願をおこして修行を積み、再びこの世に逸って苦悩している人々を救済したいと願うころのことである」(観経散善義)

このように浄土門で解釈している菩提心は極楽往生したいと願う心であり、往生したならば再びこの世に還って人々を救いたいと願う心のことである。このような菩提心ならば凡夫といえども容易におこすことができる。それなのに何故道心はおこし難いというのであろうか。それは菩提心の解釈が難しいからでもなく、難しい修行に精励しようと決心する心というわけでない。それはまず初めに人として生れて仏法を聞くことが難しいという

ことである。次には仏法を聞く機縁に恵まれても、念仏の法門にあうことが難しいということである。そして念仏の法門を聞くことができて、本願を深く信じて極樂往生を願う心をおこすことが難しいということである。念仏の法門を深く信ずることが難しいことについて、經典に次のように説いている。

「如来がこの世に出給うた時に際会できることは実に稀れなことである。もともと諸仏の教えに会って聞くことができるのは難しいことである。菩薩の勝法を聞いて布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の修行について心得ることも難しい。まして無量寿經の教えを聞くことができて心から喜んで信じ、忘れることなく持ち続けてゆくことは難中の難であつて、これ以上に難しいことはない。そこで今このように法を述べ、念仏について説き、極樂往生できる法門を教えた。まさしくこの經典を信じ、これに順じて法のごとく修行しなければならぬ」(無量寿經)

極樂往生を願う者を三種類に分けた三輩往生の上輩には出家修行その他の行があり、中輩には塔像の起立等の行がある。しかし三輩を通じて説かれている行は菩提心をおこすことと一向に専ら念仏を唱えることである。それに拘らず上人は菩提心をおこすことは余行であるとして、次のように説いた。

「三輩往生の經文には念仏の一行ばかりでなく、多くの余行を併せ説いている。上輩には家を捨てて出家し、欲望を断ずる等の余行がある。中輩には堂塔を建て、仏像をつくる等の余行がある。下輩には菩提心をおこす等の余行がある。このように余行を併せ説いているにしても、三輩往生は念仏を唱えれば往生できることを明かした文である」(選択集)

このように菩提心をおこすことを余行であると説いたことが、やがて当時の仏教界に大きな波紋をまき起すことになった。

上人ご往生からのない建暦二年(一二二二)九月に選択集が刊行されたが、同年十一月に

高弁が摧邪輪を著わして選択集を非難した。非難の第一は上人が菩提心を余行として修行から除いたことであつた。高弁は摧邪輪の初めに、次のように述べた。

「自分は年来法然上人を深く仰信してきた。これまで多くの人から上人の教えであるといつて語る話を聞いてきたが、何れも高僧の上人の名をかりて、在家の人たちが妄らに説をなすものであると思つていた。そのためにこれまで一言といえども上人を誹謗したことがなかった。たとえ人から語り聞かされることがあつても、何かの間違ひであらうと思つて信用しなかった。ところが最近になって選択集を読み、甚だ深い悲嘆にくれたのである。選択集という名を初めて聞いた時には、上人の勝れた釈文に接することができるとして喜んだ。いざ手にして一読した今になっては、念仏の眞実の教えを穢してしまったことを恨むのである」(摧邪輪)

選択集と摧邪輪は立場の相違であるから、

その立場に立てば何れも正しいことになる。上人はわが国に念仏の法門を明かして浄土宗を開いた。高弁は密教、華嚴、俱舍を学び、華嚴宗を初めとして旧仏教復興に尽力した聖道門の代表的高僧である。上人は来法動乱の世に持戒破戒もなく、無戒の時代であるとした。高弁は戒律の嚴守を提唱し、僧風刷新に努めた。上人は菩提心を余行であるとして捨てた。高弁は菩提心は仏道修行の基礎となる行であつて、菩提心なくして仏道はないとした。上人は菩提心は本願に合致しない行であるから、往生の行でないとした。高弁は阿彌陀仏は菩提心をおこして仏になり給うたのであるから、すべての本願の基本に菩提心があり、特に来迎引接の願、女人往生の願には菩提心をおこすことが説かれているという。そして高弁は菩提心こそ往生の正因であり、口称念仏は助業であるとした。

念仏の法門を批判する者は上人在世の当時からいろいろあつた。そのいうところの多く

は念仏の一行にこだわりすぎて偏狹であるということであつた。上人はこうした噂を聞いていった。

「諸行往生を捨てなくてもよいと非難する者は、浄土宗のいわれを知らないためにいうのである。無量寿經には一向に専ら阿弥陀仏を念ずることを説き、善導大師の御釈には一向に専ら仏のみ名を唱えることがあると説いている。もし經典や釈文を離れて勝手に念仏往生の義をたてたならば、たとえ責められても致し方のないことである。しかしこのように非難しようと思うならば、まず初めに釈導を非難し、次いで善導大師を非難しなければならぬ。その咎はまったくわが身の上にあるものでない」(立宗に付釈難の御詞)

仁和寺の昇蓮房が摧邪輪を持参して明遍に見せたところ、明遍はいった。

「およそ自宗の立場を主張するために他宗の教義を非難するには、まず第一に相手の教義をよくよく心得た上で非難するのが普通のこ

とである。ところが摧邪輪は選択集の立場と論旨を少しも理解しようとせず非難しているために、その非難が一向に当たっていないのである。中でも摧邪輪は選択集が聖道門の諸宗を群賊に喩えていることを過失であるとして非難しているが、これは善導大師の觀經疏にある譬喩の文を引用したまでである。この文が非難されたにしても法然房の咎にはならない。およそ迷いの世界から抜け出したいと願っている上人に対して、明恵(高弁)がこれほどまでに罵詈雑言を浴びせて誹謗していることは全く納得できないことである」(勅修御伝第四十)

選択集は初めに聖道門は教理が高邁であつて、難行道の法門は今時に適さないとして捨てた。そして従来の宗門はすべて聖道門であるとしたのである。各宗の人たちがこれを読んで不愉快に思うのは無理でなかった。それだけに選択集の教えを納得するのに並大抵のことではなかった。明禅は信空から選択集を貸

りて読んだ。初めの一回はよく判らずに読み終った。二度目はこの書は偏った見解であるという非難を招くかも知れないと思いながら読み終った。三回目に読んだ時には深退な意味があるように思えたので、四回五回と繰り返して読んだ。その内に念仏を信ずる心が深くなり、少しも疑う心がなくなった。そして明禪は次のように述べた。

「わが国で極樂往生を勧めて念仏の行を広めた人は多いといっても、法然上人ほどに信ずる者からも謗る者からも同じように毀譽褒貶を受けた人はいなかった。その理由を尋ねてみると、余行を捨てて一向に専ら念仏を唱えるように勧めていることに始まる。余行を捨てることは普通の人の教えにないのであるから、上人の教えを謗る者にはそれだけの理由がある。普通の人ではなし得ない教義をたてたのであるから、信ずる者にはそれだけの理由がある。もし上人が余行を廃して念仏を唱える義をたてなかったならば無理にも謗る者

がなかったであろうし、また強く信ずる者もなかったであろう。昔から今に至るまで余行を捨てる教義をたてた人はいなかったのであるから、誤りであるとすれば人並以上の過失であろう。ただし念仏の功德からいえば、いまだなかった大きな善根を説いたことになる。上人の教えを今までの教義に準じて考えることは決してあつてはならない。しかし上人の勧めによって念仏を唱え、極樂往生をとげた人は既に国中に多くいるのであるから、念仏の法門は勝れた功德がある教えであることに間違いがない」(述懷鈔)

上人が浄土宗を開いてから鎌倉仏教の黎明を迎えることになった。従来は仏教修行の初めであり終りであるとされていた菩提心を余行の中に入れ、その他の余行と共に捨てたところに大きな問題があった。しかしわれ等はおこし難い道心をおこして極樂往生したいと願っている。思えば、この世に生れてこれ以上の幸せは他にないのである。(つづく)

み仏とともに

=16=

—幡随院住職—



やす い こう さん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

終戦後、不思議な縁で、私が東京文理科大学に入れて頂き、その後、大学の変遷の中で十七年間も学恩を受けたことは前に書いた。今日、学者のはしぐれとして、活躍させて頂けるのも、こうした学恩によるものである。

その間、いろいろのことがあったが、不思議なめぐりあわせで、教え子であるいまの妻と結婚することになった。昭和二十九年五月十六日のことであった。妻は駒場高校の出で、教育大学時代の教え子のその教え子であった。人生の結びつきというものは、一寸した縁で結ばれるものではあるが、これが宿世の縁というものである。私と妻とは、年令が丁度一廻り違う。これもまた縁というものであろう。

しかし、華やかな新婚早々の夢も束の間で、大きな人生の波瀾が私たちに襲いかかってきた。それは、学生時代私が世話になった幡随院の住職にならぬかというさそいがやってきたからである。

当時、幡随院は小金井にあり、神林礼堂師が住職であった。この方の前歴は余り知らないが、学生時代厳しく訓育されたので、この人柄の大体は知っていた。浄土宗

政界の黒幕的存在であつたことも、後年知つたが、師自身は、晩年はそうした働きを余りせず、寺の経営と、趣味に生きておられた。

師は何事につけても達人の域に達する人で、囲碁、俳諧、尺八、造園など、その範囲は広がった。菖什という俳名を持ち、その筋でも一流であつたと聞いている。その人から思いもかけず

「幡随院の住職にならぬか」

と、或る日声をかけられた。結婚間もない頃の青天の霹靂であつた。私はその頃、東京教育大学の助手のかたわら、夜は大正大学附属高等学校（夜間）講師をして、板橋のアパートに生活をしていた。全く予想もしていなかつた申し出に、夫婦とも慌てた。

幡随院には、私が学生時代ご厄介になつた白道寮というのがあり、その卒業生は九曜会という組織は入つてゐた。会員は五、六十人もいたであろうか。岸覚勇師などもその一人であつた。神林師には寺を持つ後継者がいない為、幡随院の後継者を、この九曜会から選ぶことにし

て、その規約を作り、最初の候補者として、私を選んだのであつた。本来この寺は、伊達家が浅草時代経営してゐたが、後嗣がなく、神林師が引き受けたが、そこには難しい人間関係もあつたようである。そして、その難しい人間関係は、後々まで続いてゐたが、結局、九曜会からということ、私に白矢がたつてしまつた。そうしたことは、後々まで色々なしこりが残つて、私も苦労した。

それよりも、とも角、こうした申し入れに対して決断せねばならず、師匠や知人達とも相談した。特に結婚したばかりの妻がどう考えるかが、私にとっては大きな関門であつた。妻は在家の出で、寺などは一切知らず、おまけにこうした話が突然飛び込んできて、面くらつたようである。そして、当初は入寺に反対した。

私自身も、京都の寿仙院の後嗣を約束している手前、この方も考えねばならず、神林師の矢のような催促に板ばさみになり苦しんだ。そして、毎日のようにこのことについて、若い妻と口論せねばならなかつた。

京都の寿仙院は、遠いため、東京に居を構えている以上、なかなかおいそれと世話を見ることもできなかつ



——幡随院本堂前にて両親と共に（昭和30年）——

た。片岡上人からも、

「切角の機会だから、幡随院に入ったら」

ともすすめられた。しかし、この時の片岡上人の気持ちは、さぞ断腸の思いであったに違いない。結果的には、片岡上人のご恩にも報いず、幡随院に入ってしまったのであるから、今にしてみれば、申し訳けないことをしてしまった。それは私の生涯の中での、大きな悔を残す一つである。

しかし、この時は、いろいろな考えが、私を左右した。第一、東京で寺の住職になれるということは、勉強もでき、寺にも入れるという最適の機会ではないか。それに両親の元気なうちに寺の住職となつて、兼ねての両親の願いを満足させてあげなければならない。そうした気持ちで最後には勝つて、終に妻の反対を押し切つて、幡随院入りを決断した。勿論、妻もあきらめたのか、最後には協力を約束してくれた。しかも妻にはすでに長男が宿っていた。こうしたことも、そのときずなを断たずにこられた宿縁かも知れない。

しかし、さて幡随院に入ってみると、二人にとってそれは大変な試練であった。二人には門前の住職舎宅という六畳二間の別宅があてがわれ、私は毎日ここから寺に出仕する形を取った。寺には女房は入れぬという鉄則を神林師はこうした形でとられた。師自身も、夫人は寺に入らず、別な女性が世話をして、寺を切りもりしていた。

私は、毎朝五時に起床して、本堂で神林師と念仏するのが日課であった。六時半頃寮生が上ってくる迄念仏し、それから日常勤行をやり、終って寮生と朝食を取り、寺の仕事に入るなり、学校に出掛けた。随って、妻とも朝食を共にすることはなかった。寺生活を久しく離れていた私にとっては、なかなかの難行苦行であったし、妻にしてみれば、新婚間もない生活としては、味気ないものであったに違いない。しかし、一単、引き受けた以上、私はその困苦に堪えて頑張った。

一番大変だったのは、広い庭の手入と掃除であった。寺に居る限り、この仕事を、神林師と共にやった。これはなかなかの苦労であったが、お蔭で私は、樹木の手入れ法を随分と教えられた。大きな松の木に登り、手入れ

をしたり、木を植えかえたりで、寺に居る限り重労働であった。時には寮生をアルバイトに使用しながら、仕事をした。

檀家は少なかったが、それでも月に何回か法事もあり、葬式もあった。住職である私が導師となるのであったが、神林師は休まず同席した。そして厳しく指導された。これも当然のことと有り難いながら、又苦勞の種でもあった。しかし、次第に馴れて、何とかやって行けるようになった。

幡随院に入ったのは、昭和二十九年の秋も終るころであったと思うが、その翌年に両親を呼んで、寺生活を見てもらうことにした。両親は喜んで多分三月頃連れだってきてくれた。そして、五千坪もある大きな寺を見てびっくりした。

「なんて、大きな寺だろうね」

母は驚きと、喜びと、悲しみともつかぬ顔で、この大きな庭を見つめていた。両親にしてみれば、小さな寺の住職になって、両親がお念仏でき、草むしりができるこ

とで、充分満足する筈であった。ところが、こんな名利で、大きな寺に入るとは、何ということかという、いささか不満とも、ためらいともつかぬものがあつた。その気持ちには充分分つていた。

それでも両親は、朝早くから起きて、本堂に登り、一緒に念仏をし、昼間は庭に出て草取りをどをしていた。

「東京見物につれていこうか」

とさそつても、それより寺にいる方がよいと動かなかつた。そして多分、四、五日間滞在して帰つて行つた。果して両親が、こうした私の生活に満足していたかどうか、その気持ちを聞いたことがないが、父は何となくうかぬ顔をして、昔の明るいおもかげがなかった。その頃父は、老人鬱病にもかかつていて、何となく元気がなかった。

その年の五月十三日に長男が生まれ、わが家にも生気がでてきた。そして、私の生活も、私なりにその在り方を定着させ、毎日が過ぎて行つた。

「両親に初孫を見せてあげなければ」

そんな会話を夫婦が交している矢先に、大変な知らせが、或る朝飛び込んできた。父の危篤を知らせる電報であつた。私は取るものも取り敢えず、滋賀の田舎に飛んで帰つた。

(つづく)

『新刊』

竹中 信常著

『宗教的体験と人格』

A5判 上製函人 三九五ページ

定価 九五〇〇円

△発売▽

山喜房仏書林

〒133 東京都文京区本郷五―二八―五

(振替) 東京 〇―一九〇〇

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記（十二）

—天水麦積山—



きのしたりゅういち
木下隆一

（随筆家）

成田を発って十一日目。九月十日の朝は汽車の中で明けた。汽車は山間を走っていた。昨夜相当量の雨が降ったらしく、山という山から黄濁した水が滝となって落下している。その水は谷へ、谷の水はそのまたずっと下の、恐らくは昨日まで乾河道であったと覚しき辺りへ流れ落ち、奔流となって流れ去って行く。大陸の雨は一旦降り始めると、想像を絶する降り方をするらしい。一夜にして砂漠の町を押し流してしまったという記録があるが、この黄濁した奔流を目の当たりにすれば、それが誇張でない事は一目瞭然である。一体どの位の降水量を記録するのであろうか。

やがて、汽車は平地に出た。霧が立ちこめているので、平野なのか盆地なのかははっきりしないが、瓦屋根の家屋で点在しているから、人が住んでいるのは確かである。ただ、その家屋は甚だ奇妙な形をしていた。片側だけに屋根を出した。切妻の家を真つ二つにしたような扁平な構造なのである。片切妻と私は勝手に名付けたが、こんな家屋にはその後お目にかかる事はなかった。箱型の土屋ばかりを見て来た目には、雨に濡れた黒い瓦の色は懐しく。瓦が葺かれているという事が、この地方が雨の多い所である事を物語っていた。

小駅を通過する。雨はすっかり上がっていたが、ホームはまるで泥田で、次の普通列車に乗る人達が靴を手にぶらさげて、一足一足抜き上げるようにして歩いている。さして嫌がっているふうでもない。ここでは日常茶飯の事なのであろう。天水もこうなのかな、私はあと数時間で着く天水に思いを馳せた。ごく最近外国人の立て入りが許可になった天水地区。その天水の駅から南東四十五キロの所に、今日訪れる麦積山はある。正規の観光団としてこの地に入るのは、我々のツアーが初めてであるが、少し前に友好関係を結んでいた秋田県の林業組合の人達と、同行した秋田放送の取材班が足跡を印している。麦積山詣でもさる事ながら、天水という地区に私は興味があった。中原を目指す蜀の孔明に一泡吹かせた魏の武将姜維（後に蜀に降り、孔明の衣鉢を継ぐ。当時二十歳前の美少年であったと言う）の故郷をこの目で確かめて、『三国志』のロマンに浸りたかったのである。

まだ賓館^{ホテル}がなくて——と恐縮する招待所の人の案内で、大衆食堂風の所で朝食を認めた後、ジープの先導で、二台のマイクロバスに分乗して麦積山へ向かう。トランクやその他諸々の荷物は、後続するライトバンに積み込まれている。二十名のツアーには大仰すぎるキャラバンである。町筋をはずれ



——麦積山石窟の塑泥像——

ると、道は忽ちに泥濘と化す。濁流渦巻く大河（黄河の支流）を渡り切ると、道は一層ひどくなくなった。バスは泥水に車輪をとられながらも、強引に突き進んで行く。一キロ足らずの悪路が尽きると、車は左折して河沿いの道を溯るかたわで麦積山を目指す。右手には畑地が拡がり、ゆるやかな山地に延びている。高粱、玉蜀黍、煙草、粟、綿、豇豆に似た豆等々、いろいろな物が作られ、薄紅の蕎麦畠が裾模様のように岩だらけの山を彩っている。この蓮華田に似た眺めはなかなかいい。次々小集落を通過する。殆んどの家が柿の木を持っており、小さい実が青く艶やかに光っている。渋柿であろうか。日本の柿のルーツは案外この辺りかも知れぬ、ふとそんな事を考えてしまふ。農家の庭には幾つも野積みされた堆肥の山が置かれている。麦積山の名の由来は、麦藁を積み重ねたこの堆肥の山に似ている所からと言われているが、実物を見ない限り、いまは何とも言いようがない。植物性

の物なら何でも積み重ねて、時間をかけて風化させるらしく、古い物は殆んど土に還っている。これ
を突き崩して畠に鋤き込むのであろう。

行く程に、増水して野川が行く手を阻むが、車はかまわず濁流に乗り入れる。それ程深くはなく、
よく見ると、道幅だけ川床に石が敷き詰められている。不断は水無し川か、あっても細流で、何故か
清冽な水が流れているような気がしてならなかった。何本かそんな川を渡って、車は甘泉という大き
な集落に入って行った。唐の詩人杜甫が一時住んでいたと言うが、私の記憶にはない。そんな事があ
ったとすれば、安祿山の乱をのがれて、妻子と共に流浪していた頃の事であろう。大集落と言っても
狭い道の両側五、六百メートルに人家が並んでいるだけだが、仲秋節の市が立っていて、買物客でご
った返していた。そう言えば、今日は仲秋の名月だと、改めて窓越しに空を見上げると、黒雲が脚速
に視界を通り過ぎて行く。天気は急速に回復しつつあるようだが、甚だ心許ない。今夜の月見は諦め
た方がよさそうである。いろんな露店が軒を連ねているが、月餅を商う店が一番多い。一口大の物か
ら、円盤投の円盤程ある大きな物もある。種類も形も雑多で、蒸しパン風の物も月餅と呼んでいるよ
うであった。

クラクションを鳴らしづめに鳴らし、やっとの思いで市の雑沓を抜けると、車はゆるやかな坂道
を登って行った。それにつれて、木々の緑がだんだん深くなって行く。道の辺に芒や野菊が咲き乱れ
て、秋冥菊の花も見られる。日本では珍重されるこの花も、ここでは単なる雑草に過ぎない。数日前
まで荒寥としたゴビの風物に接していただけに、緑が目にしみて心洗われる思いがする。つと、先導
のジープが道をそれて河原の方へ降りて行った。通常の道路は工事中で、河原に臨時のバイパスが出
来ているのである。トラックが一台、対岸の崖を滑るように大きく揺れながら降りて来る。降りる事
は出来ても、登れなければ、麦積山行は中止である。たいして高い崖ではないが、雨に濡れて滑り易

くなっているのと、崖下の所が水に抉られているのが通行を困難にしていた。大勢の人が石を運んで補強工事をしているわけだが、なかなか捗らない。とうとう全員バスから降ろされてしまった。身軽にして、取り敢えず車体だけを上げようというのである。先ずジープが登攀を試みる。途中で一度ずり落ちたが、無事に崖の上にたどり着く事が出来た。期せずして河原のあちこちから拍手が起こる。二台のバスはジープに引っ張り上げられたが、我々は徒歩で行かねばならなかった。ライトバンはしばらく置き去りにする。大仰なキャラバンは、あらかじめこういう事態を想定して組まれたようであった。とにかく我々を通すために努力した人達には、いくら感謝してもしきれない思いがする。半ば諦めていた麦積山行を可能にしたのだから。一期一会の人達の、拍手で送ってくれた笑顔が爽やかだった。

あれが麦積山です——緑の中から抽ん出た前方の山を指さして、招待所員が言った。山頂の部分は樹木で覆われているが、三方は切り立った断崖で、ドーム状の形は麦藁を積み重ねた堆肥の山、それも風化した堆肥の山に似ていない事もない。バスを降りてふり仰ぐと、東方崖に造られた摩崖三尊像に、雲間から射した日が当たって金色に輝いている。麦積山自体は脆い礫岩(花崗岩)なので石彫にはむかず、ここの仏像の殆んどは塑泥を盛り上げて彫塑した塑像との事だが、三尊像は遠目には岩を彫ったと思えなかった。美しい仏像である。石窟へ向かう道はよく整備されていて、礫岩質の土の色のせいか、洛北の鞍馬か高山寺辺りを歩いているのとなんら変わりがない。道を登りつめると、三尊像の足許に近い広場に出た。ここが窟龕巡りの起点であるが、脆い石階を踏み、棧道を伝い、梯子を昇り降りしなければならぬ。上からの眺望は素晴らしいに決まっているが、やんぬるかな、膝の痛みが行く事を思いとどまらせた。

文物保管所の売店で、パンフレットを買う。○・五四元である。簡体字混じりの文面は読みづらい

が、推測を交えれば何とか意味は通じる。それによると、十六国時代の後秦の頃、僧曇曠^{どんこう}によって開かれ、以来一千六百年近くの間、西秦、北魏、西魏、北周、隋、唐、五代、宋、元、明、清等、十数代の王朝によって絶えず開鑿修復が繰り返されて今日に到っているということである。石窟の数は百九十四、塑泥像は七千余体に達しているが、西暦七三四年（唐の開元二十二年）の大地震で数多くの窟龕が破壊されたとも記している。七五九年（唐の乾元二年）、詩人の杜甫がこの地に杖を引き「野寺殘僧少 山園細路高 麝香眠石竹 鸚鵡啄金桃」という詩を残しているが、地震の後遺症や安祿山の乱など政情不安が重なって修復もままならず、荒れ果てていたのであろう。杜甫は、薬草を採り、それを売って生計を立てていたというから、甘泉にいた頃、薬草を求めてこの辺りまで来たのかも知れない。「冬暖夏涼」という文字がパンフレットに出て来るが、氣候が温暖な事は杜甫の詩からも充分読みとれる。しかし、その一方では陰湿多雨で壁画の剝落が激しいという記載もあって、人が住むにも適しているが、壁画の保存には苦勞しているようである。杜甫の詩句中にある「山澗溪流噴翠 林中鳥語鶯啼」と書かれた部分は、麦積山の景觀をよく写している。鶯の代りに四十雀^{しじゅうから}が可憐な姿を見せてくれた。

文物保管所の中庭に、こんこんと水が湧き出している井戸があった。こんな高地に噴井^{ふんい}があると、両手を浸すと、清水の冷たさが身にしみた。天水は雨に恵まれた所、甘泉は良質の水を産する所という意味か。そしてここにもうまそうな水が湧いているのである。味わってみようかと思ったが、旅もあと僅かである。水当たりでも起こしたら、それこそ元も子もなくなってしまふ。多少の未練を残しながら、飲むのだけは差し控えた。

（続く）

立ち止まるな善導

〈25〉

寺内入吉

挿絵・松 濤 達 文

女の戦場

七



「李猫」と呼ばれて宮廷内を我がもの顔でのし歩き、「笑中に刀有り」で平然と暗殺剣をふるった李義府の権力は則天武后の寵を背景として年ごとに肥大化していった。

——李義府、寵を待み事を用う。洛州の婦人淳干氏、美色あり。大理の獄に繋がる。義府、大理寺丞畢正義に属し、法をまげてこれを出ださしむ。まさに納れて妾となさんとす。大理郷段宝玄、疑ってこれを奏す。上（高宗）給事中劉仁軌らに命じてこれを鞠せしむ。

い」

君寵に狎れた李義府は恐縮するどころか、「誰が陛下にそんな告げ口をしたのでしようか」

「告げ口ではない。わたし自身が調査したところだ」

高宗が怒っているのに、いっこう通じる気配がない。

「資治通鑑」は「義府、殊（た）えて咎めを引かず、緩歩して去る」と描写するが、傲慢不遜な態度で御前を退出した。現実にはこのあと李義府は密告した奴は誰か、と政庁内を嗅ぎまわる。

義府は杜元紀という占い師を愛顧していた。その占い師が「どうもお邸に獄氣、みたいなものが立ちこめています。これを払拭するには二十万錢を必要とします」と告げた。この言葉を信じた義府は賄路の取り立てをいつそうきびしくした。さらに杜元紀の妖言を信じこみ、深夜になると先帝の廟所をうろつき

まわった。李義府にすれば夜雲をとおして故人と会話をかわすわけだが、周囲ではそうは取らない。密議をこらしている。それも現皇帝の暗殺を企らんでいるにちがいない。

そんな噂が高宗の耳にまで届けられた。高宗は則天武後に意見を求めたが、なぜか彼女は李義府をかばう言葉は口にしなかった。高宗が身辺調査を始めると、ふだんから憎しみを買っていた中書令のことだ。不利な証言はあとを絶たなかった。

高宗は勅を発して李義府の「名を除き」身柄を四川省の嶺（ずい）州へ流した。さしもの「李猫」も今度ばかりは息の根が止められたかにみえた。

珍らしく高宗が武后を恐れず、英断を下して君側の奸を追放できたのは唐王朝の国威が大いに宣揚されていたさなかだったからである。

「資治通鑑」は、同じ龍朔三年（六六三）朝鮮半島における戦争状況を伝えている。

百濟王「豊」、南のかた倭人を引き、以て唐の兵を防ぐ、仁師は仁願・仁軌（いずれも唐将）と合い、兵勢おおいに振るう。諸将、加林城は水陸の衝なるを以て、先づこれを攻めんと欲す。（中略）ここにおいて仁師、仁願、新羅王法敏とともに陸軍を率いて以て進み、仁軌は別將壮爽、扶余隆とともに水軍及び糧船を率い、熊津より白江に入り、以て陸軍に会し、同じく周留城におもむき、倭兵と白江口に遇う。四たび戦って皆捷つ。その舟四百艘を焚く。烟炎、天を灼き、海水みな赤し。

倭兵とは言うまでもなく日本軍である。南朝鮮に任那を領していた日本政府はそこに軍隊を常駐させていた。これが百濟王軍と連繫して唐軍と戦ったのである。日本で言う「白村江の戦い」である。その舟四百艘を焚かれ、烟炎天を灼き海水みな赤し、と書かれている。全滅にひとしい大敗北だった。日本は

朝鮮半島の拠点任那を失った。

同じ年、唐の軍隊は西域でも武威を伸張させている。

安西都護高賢を以て行軍総督となし、兵を率いて弓月（大月氏）を撃ち、以て干闥（コータン）を救わしむ。この歳、大食（アラビヤ）波斯（ペルシャ）払秣（東ローマ帝国）を撃ちてこれを破り、南して波羅門（インド）を侵し、諸胡を吞滅し、勝兵四十余万あり。

東西で戦果をあげているのである。高宗の自信もだが、唐政庁内における武官たちの発言力が増大したことは充分に想像できる。文官にすぎない李義府の追放は容易だったことであらう。

実姉の韓国夫人を謀殺して八年間が過ぎた。その娘賀蘭氏も二十歳をこえにいまは女盛りである。好色な高宗皇帝がこの絶世の美女を見逃すはずがない。たちまちお手がついた。後宮へはいって寵を一身に集め、魏国夫人という称号をもらった。

姪が愛寵されることで則天武后に不満は殆んどない。嫉妬に身を焦がすほど彼女の感性は、いびつではなかった。女閨の拡大を企業伸張ぐらいに考えているのである。

唯一点気になるのは夫の高宗が姪を溺愛しすぎることだ。溺愛されて姪が凶に乗って母の死に関する疑惑を洩らしはすまいか。武后としては何とか手を打っておかねばならぬ。

だが、これまで直接の下手人ではなかったが、武后の手足となって動いてくれた甥の憚良はすでにいなかった。少年は一昨年、誰にも相談しないで西明寺へ出家してしまったのだ。少年期を脱したとはいえ未だ十七歳だっ

た。宮廷における明け暮れが如何に小さな胸を傷けていたかがわかるであろう。

則天武后は四川の僻地に雌伏する「李猫」の李義府へ密使を送った。中央政府へ返り咲ける絶好のチャンスだ、とうながした。ただし長安や洛陽へ姿を現すわけにはいかない。

乾封元年（六六六）の春正月、高宗は泰山へ向った。そこは山東省の山塊にある道教の祠で、中国最高の靈域であった。統一天下に君臨する王は、ここへ登っていっそうの徳政を誓うのである。「封禪の儀」と呼ばれた。林語堂はこの儀を「人間界の統治者が天帝と親しく姻戚関係を結ぶ神秘的なセレモニー」と言いあてる。

まさにセレモニーであって、戦略上その持場を離れられない者を除くすべての王族、臣下が集結して泰山へ向け大行進をおこす。街道は人馬で雑踏する。外国使臣もこれに加わり、トルコ、ペルシャ、コータン、インド、カシミール、ウジャールナの西域諸国を始め、

朝鮮三国や日本の使臣までが参加した記録もある。

この封禅儀を提唱したのは則天武后で、高宗ばかりでなく自身の皇后位を神格化させるねらいがあった。古来の慣例によると泰山へ女人が登頂することは禁じられていた。だが武后は断古としてこの古式を改め、天に祈る山頂へこそは登らなかつたが、すぐ下の社首山にある地神への祈りには参加することを主張した。今後の皇后位を権威づけるためだった。高宗も押し切られた恰好になった。

民族が山東省へ大移動するような大セレモニーだ。四川から李義府も隠密に参加したらしい。武后の誘導で皇族グループへまぎれこんだ。

山頂での礼拝が終り、三日目からは社首山麓で地神への祈りが開始された。宗教儀礼が済むと音楽や演舞の奉納に移る。

大規模な演舞は百人以上が踊る「敵を斬る」という題名の神楽だった。これは先帝太

宗の作に成ったと言われ、金銀の甲冑に身を固めた戦士たちが敵を摺伏させる勇壮な踊りである。太宗自身が戦った体験をドラマに構成したものである。観劇していた高宗は父を偲んでさめざめと泣いたと言われる。

「大臣ではないですか」

則天武后の従兄にあたる惟良や懷運たちと見物していた李義府は背後から声をかけられた。ふりむくと劉仁軌の顔があった。

「お人違いでしょう」

とゴマ化さないではおれなかった。

大臣なぞ昔の呼称で、現在はこの劉仁軌が現職の中書令であった。

劉仁軌――

朝鮮の戦場、白村江で日本軍を撃破した勇将である。水軍をひきいて倭船四艘を焼き、海水を倭人の血で染めた海将である。その功績によって仁軌は中書令に任じていたのである。

悪い男に見つかったと李義府は思った。

「蜀の国におられるとばかり思っていましたのに」

「国をあげての封禅の儀です。両陛下永年の御恩顧にこたえて参じました。拝謁がかなわないのは覚悟の上です。せめて遠くからでもお顔を拝したい、とそればかり念じています」

殊勝に言う。それも若い仁軌を相手に、である。

「あのころ、わたしは大臣に殺されそうになった」

仁軌は以前の話をもしかえしてくる。

「右府を殺そうなどと滅相もない。あれは監察御史が勝手に言いふらしたことです」

百済王や日本軍を攻略すべく水軍を率いて劉仁軌が海上を急ぐとき、暴風雨に遭遇した。難波する船が続出し、将兵の多くは溺死した。仁軌はやむなく、いったん軍船をまともに白羅の基地へ引揚げた。

督軍司令だった右府の李義府にその旨を報

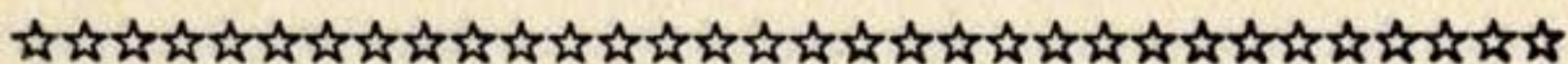
告すると、彼はすぐに高宗へ言上した。「資治通鑑」によれば、

義府、上(高宗)に言つて曰く「仁軌を斬らずんば、以て百姓に謝するなからん」と。舍人源直心曰く「海風にわか起る。人力の及ぶところに非ず」と。上、すなわち命じて名を除き、白衣を以て軍に従い自らいたさしむ。義府、また劉仁軌に諷してこれを害せしむ。仁軌、殺すに忍びず。

將軍たちは李義府のやり口に腹を立て、いわばやけっ八になって百済王や日本軍攻略に突入していったのである。それが大勝につながった。

「まあ、あのとき大臣が刃をつきつけて督励してくれたおかげで、わたしも今日の地位を得たようなものです」

「菩薩に似た言葉をおっしゃるが、それが恐



笑
劇



ろしい」

李義府は警戒心をゆるめてはいなかった。

「恐ろしいことはありません。あの折のお礼に、いま大臣が此処にいることは誰にも洩らしません」

「それを、まともに受けとつてもよろしいのでしょうか」

「もちろんです。唯一点だけ、教えて下さい」

「どんな点を？」

「いずれ中宮の招きで蜀を出ておいでなのでしようが、用向きは何ですか」

「用向き……何にもございませんよ。先刻から申しているように封禅儀を拝見させて頂くだけです。それと」

「それと？」

「ここにいる司衛少郷や溜州候にお近づきを得させて頂くことだけです」

司衛少郷とは武後の従兄惟良のことで、溜州候は懷運の官名であった。

その「お近づき」が彼らを暗殺する結末になろうとは、李義府自身もこの時点では知る由もなかった。

「いずれ現在わたしがいる地位に大臣が再び返り咲かれることでしよう」

劉仁軌はそんな気休めを言うと、群臣で雑踏する席間へ消えていった。

すでに正面の舞台では勇壮な剣舞が一転し、「踏揺娘」という笑劇が演ぜられていた。

その人妻はたいへんな美女である。亭主はふた目と見られないような醜男である。亭主が近づくたびに、美女の妻は「おぞ毛」をふるいたたせる。

つまり、その嫌悪と恐怖、軽蔑までまじえて震えあがる女の姿が、この演し物の見せ場であった。観客は身をよじって笑いさざめきながら「もっと震えろ。姐さん、もっとだ」と叫ぶのである。このほかにストーリーらしいものは何もない笑劇だった。

いまま満場は爆笑の渦だ。さっきまで父を
 偲んで泣いていた皇帝高宗が、身体を揺すつ
 て笑っている。傍らに坐る若い女性と肩先を
 ぶっつけ合いながら笑いほうける。

一人だけ、ことりと表情を崩さない観客
 がいることに、李義府は気づいた。深刻な悲
 劇でも眺めるようにその女客は、まばたき一
 つ打たず、舞台ではなく高宗を凝視してい
 た。高宗にだけではない。その視線は傍らの
 若い美女へそそがれるとき、より鋭くより深
 い憎しみをふくんで光った。

けわしい表情の女客は則天武后であった。
 李義府の席からも、また高宗皇帝たちの玉座
 からも、かなり離れた通路に立ちつくす武后
 だったが、その表情は正確に捕捉できた。そ
 して彼女が、より鋭く、より深い憎しみをた
 たえて凝視する相手こそ、武後の姪魏国夫人
 であった。高宗に腕をゆだねながら、舞台上
 の演技を笑顔のなかで心から楽しんでいる。

九

封禅の儀がおわり、高宗以下の文武百官は
 洛陽城へ帰った。諸侯たちも各封地へ散って
 いった。

洛陽の西郊に治觴という里邑がある。造り
 酒屋が密集している。「鶴觴」と呼ばれる伝
 説的な名酒を産出した街である。六世紀の永
 熙年間、毛鴻賓という南青州刺史がこの酒甕
 をたずさえて赴任した。旅の途次、盗賊に襲
 撃された。盗賊たちは「仕事」をする前に甕
 の「鶴觴」を呑んだ。全員がたちまち酩酊、
 手足がしびれて動けなくなってしまった。毛
 鴻賓は難なく盗賊たちを縛りあげ、刑吏に突
 き出した。「治觴の酒を呑んではいけない」
 そんな戒めが遊俠の徒たちの間で語りつがれ
 たという。

そんな造り酒屋の奥まった部屋で、ひそや
 かな酒宴がひらかれていた。遊俠の徒や盗賊

ではない。李義府と惟良・懷運の兄弟である。あまり酒のピッチはあがらなかった。声を低くして密談をかさねているのだ。

「それは命令なのか、意志なのか」

兄弟はこもこも李義府にくり返し念を押す。

「命令ではない。意志です」

きっぱり答えるが、

「命令でなくて意志か、しかし、それは曖昧だな」

「意志がなくても命令が発せられていれば、ことは鮮明だ」

兄弟の言い分に李義府は同じ言葉をくり返すしかない。

「その意志を信ずるしかないでしょう。成功させて皇后が満足したとき、はじめてあなたがたは浮び上がれるのです」

「そして大臣、あなたも廟堂へ返り咲くことができる」

泰山における封禪の儀がおわり、この三人

は洛陽まで戻ってきた。しかし王城の内へはいることは許されなかった。いずれも謹慎中の身だったからである。

李義府が四川の片田舎へ追放された事情は前にふれた。惟良と懷運の兄弟は、従妹である則天武后の「引き」で異例の出世をしたわけだが、彼らはさっぱり感謝する気配がなかった。武后の実母榮国夫人がその点を確認すると「惟良ら幸いに功臣の子弟あるを以て、早く宦籍に登る。分をはかり才をはかり、貴達を求めず。豈におもわんや。皇后の故を以て、曲げてになわんとは、夙夜憂懼(苦)し、業となさざるなり」(『資治通鑑』)に答えている。武后の「引き」は迷惑でこそあれ、いささかも榮譽ではないと言いかえした。

榮国夫人はさっそく娘の武后に告げ、怒った武后は惟良を始州へ、懷運を瀘州へ刺史として流したのである。

こんどの封禪の儀、李義府とは異なり参加を許されたが、左遷が撤回されるのかどう

か、なお可能性は半々であった。

その半々を確実な側へ引き寄せるために李義府は武後の意志の代行を兄弟にうながしている。

「意志か命令かの問題はしばらくおいて、その方法を訊こう」

惟良は話を前進させた。

「ここの酒です。盗賊どもを酔いつぶした名酒です。これを用いるのです。酔いつぶれたあとは、どうにでもなります」

「どうにでもなるって、剣でも用いるのか」

「剣はまずいでしよう。血が流れます。やはり毒です」

「その毒を、わたしがあらかじめ所持してゆくのかね」

「その必要はないでしょう。運ばせます」

「誰に？」

「猫に運ばせます」

「猫……ああ、李猫か。あれの母親を毒殺した猫か」

「韓国夫人は死にましたが、毒を運んだ猫も死にましたよ」

「それを操った李猫だけがびんびんしているわけか」

三人がねらった殺しの標的は若い魏国夫人であった。

「資治通鑑」はこの殺害事件を則天武后が犯人だと断定する。

上(高宗)魏国を以て内職となさんと欲す。

心に后をはばかり未だ決せず。后、これを悪(にく)む。たまたま惟良・懷運、諸州の刺史とともに泰山へ詣(いた)りて朝覲し、従いて京師に至る。惟良ら食を献ず。后、ひそかに毒を醢中(かいちゅう)に置き、魏国をしてこれを食らわしむ。にわか卒す。因って罪を惟良・懷運に帰す。丁未、これを誅し、その姓を改めて蝮氏とす。

則天武后自らが毒を調合した料理で魏国夫

人を毒殺したというのである。果たしてそうだったのだろうか。あれほど溺愛した高宗が、こんな仕打ちを加えられて黙っていたのであろうか。

いかに権力専横の則天武后とは言え、ちよつと信じ難い。

李義府の名は、いっこうに出てこない。しかし「資治通鑑」はこの記事の前で、さりげなく消息をつたえている。

時に大赦するや（封禪の儀による恩典）ただ長流の人のみ還るを聴（ゆる）さず。李義府、憂憤し、病いを発して卒す。義府が流竄せられしより、朝士日々にそのまた入らんことを憂れう。その卒するを聞くに及び、衆心すなわち安んず。

李義府は封禪の儀による恩典に浴することはなかった。彼はこれに憤慨し、病いを発して死んだという。李義府が四川へ追放された

ときから廟堂の人々は、いつ彼が突然舞い戻ってくるか、とおびえていたという。舞い戻れば彼をそしった者は必ず残忍な復讐を受けるにちがいないからである。死んだと聞いて、ほつと安堵の胸を撫でおろした。

廟堂におけるこの恐怖感――

則天武后がこれを利用しないはずがない。おそらく姪の魏国夫人や従兄の惟良・懷運兄弟の殺害にこの「笑中に刀あり」とうたわれた殺し屋をけしかけたことであろう。そればかりか、最後には李義府自身の止どめを刺したはずである。

真犯人が誰であったにせよ、則天武后が血を分けた実姉とその娘とを死に至らしめた事実だけはまぎれもない。高宗の後宮へ返り咲いた十年そこそこに自身が生んだ嬰兒をもふくめて五人の生命を奪ったわけだ。だがこの数は、さらにこの十年後に始まる殺害ラッシュに比べたら九牛の一毛とでも呼ぶべきであろう。

（つづく）

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字用紙五〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円
(送料不要)

浄土 五十二巻 七月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和六十一年六月二十五日 印刷
昭和六十一年七月一日 発行

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒二〇三 振替東京八―八二一八七番

第五十二卷

七月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十一年六月二十五日印刷 昭和六十一年七月一日発行